

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：12606

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K14935

研究課題名（和文）近代天皇制における儀礼空間の都市間比較研究

研究課題名（英文）A Comparative Study on Urban Ceremonial Space under Modern Emperor System

研究代表者

長谷川 香（大木香）（Hasegawa, Kaori）

東京藝術大学・美術学部・講師

研究者番号：90850826

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近代天皇制における儀礼空間について都市間の比較研究を行うことで、近代の天皇制儀礼が今日にいたるまでの諸都市の形成に及ぼした影響を明らかにするものである。当初は、軍都をはじめとする日本の地方都市と台湾を調査する予定であったが、コロナ禍の影響により、主に東京と京都、大阪を研究対象とすることとした。

2020-2022年度には、明治から平成までの大喪儀について、儀礼後の仮設建築の譲与と転用について現地調査・文献調査を行い、その成果を論文として発表した。

また、2022-2023年度には、東京・大阪・京都で開催された内国勸業博覧会の儀礼空間の実態を明らかにし、論文として発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大喪儀の仮設建築の譲与と転用に関する研究や内国勸業博覧会に関する研究の成果は、学際的な研究会（明治神宮史研究会、万博学研究会）で発表し、学問領域を超えた議論に寄与した。とくに前者の研究は、大規模な皇室儀礼を行う際の資源や環境への配慮にかかわる論点を含んでいることから、学術界のみならず、広く日本の現代社会における都市開発や国家的な儀礼をめぐる議論、さらには国際社会におけるメガイベントのレガシーやサステナビリティをめぐる議論において、有用な歴史的視座を提供することが期待される。

研究成果の概要（英文）：This study is a comparative study of ceremonial space in the modern emperor system across cities to analyze the influence of modern imperial ceremonies on the formation of various cities up to the present day. Originally, the survey was planned to cover the military capital and other local Japanese cities and Taiwan, but due to the Corona disaster, the survey target was changed to Tokyo, Kyoto and Osaka.

In FY2020-2022, I conducted field and literature research on the assignment and conversion of temporary buildings after ceremonies for the Great Mourning Ceremonies from the Meiji Era to the Heisei Era, and publish the results in 2 papers.

In 2022-2023, I clarified the actual condition of the ceremonial space of the National Industrial Expositions held in Tokyo, Osaka, and Kyoto, and published it as a paper.

研究分野：都市史・建築史

キーワード：近代天皇制 大喪儀 仮設建築 転用 記念

1. 研究開始当初の背景

明治2年(1869)の東京奠都により、行政機関や皇族・華族の邸宅など様々な施設や機能が京都から東京へと移転し、それに伴い、国家と天皇に関わる公的な儀礼の中心地は京都から東京へ移った。近世までの天皇は御所から外出することがほとんどなく、天皇に関わる儀礼は御所やその近辺で、限られた皇室関係者のもと催されたのに対し、皇室と関係深い施設が存在しなかった奠都後の東京では、近代以降に整備された御料地(宮城前広場)や練兵場(日比谷練兵場、青山練兵場、代々木練兵場)、江戸幕府縁の地を読み替えて整備された公園(上野公園)などが儀礼会場として利用された。宮城外が会場敷地とされたことにより、天皇は大規模な行列を率いて市街地を横断することとなり、儀礼は都市へと展開した(T・フジタニ『天皇のページェント』1994年)。さらに、日本全国への巡幸啓も盛んに行われ(多木浩二『天皇の肖像』1988年)、地方都市や外地でも軍事儀礼や市民による奉迎会が数多く催された(原武史『可視化された帝国』2001年)。

上述のように、先行研究では、主に政治史や社会史、民俗史、文化史の分野において、「天皇と王権」、「創られた伝統」、「権力の視覚化」といった観点から、近代天皇制における行幸啓や都市を舞台とした儀礼の重要性が指摘されてきた。そして、2019年には戦後2度目の天皇の代替わりが実施されるなかで、日本史学の分野を中心に、改めて天皇制の歴史に向き合い、その存続を問う研究が行われている(御厨貴編著『天皇の近代』千倉書房、2018年、歴史学研究会編『天皇はいかに受け継がれたか 天皇の身体と皇位継承』績文堂出版、2019年等)。

その一方で、戦後から今日にいたるまで、近代天皇制と結びつく都市の歴史は積極的に語られない傾向にある。しかしながら、近代天皇制において主な儀礼会場として利用された宮城前広場(現・皇居前広場)や青山練兵場(現・明治神宮外苑)、代々木練兵場(現・代々木公園)等は、戦後、その所有者や用途は変化したものの、敷地割は引き継がれ、今日の東京都心部において貴重な緑地や公共空間を形成し、都市の重要な要素となっている。昨今の新国立競技場建設問題をめぐる明治神宮外苑の景観に関する議論(榎文彦「新国立競技場案を神宮外苑の歴史的文脈の中で考える」『JIA MAGAZINE』2013年8月)に見るように、近代天皇制のなかで形成されたそれぞれの敷地の歴史的文脈を理解し、継承してゆくべき景観を検証することは、東京に限らず、今後の都市開発の方向性を考えるうえで重要である。

以上のような背景から、申請者はこれまで、儀礼の中心地であった東京を対象とし、明治初期から昭和戦前まで、天皇または皇太子の臨御のもと催された各種儀礼(祝賀儀礼・大喪儀・軍事儀礼)を悉皆的に調べ上げ、都市史的・建築的観点から各儀礼の会場や経路の分析を行うことにより、近代天皇制における東京の儀礼空間の特質を明らかにした。そして、近代における儀礼空間としての利用が、今日にいたるまでの東京の都市形成に少なからぬ影響を及ぼしたことを指摘した(研究代表者博士論文「近代東京における国家と天皇に関わる儀礼空間の研究」2018年)。

しかしながら、近代日本における儀礼の中心地は東京であったが、先に述べた通り、他の都市でも天皇や皇太子が臨御する儀礼が催された。とくに、地方都市においては、儀礼の開催や行幸啓は数十年に一度の一大イベントであり、東京と比較して頻度が低い一方で、1回の儀礼が都市に与える影響はより大きかったものと予測される。近代天皇制と都市の関係性をより俯瞰的に捉えるためには、東京以外の都市も視野に入れ、近代の東京を対象とした研究によって見出された儀礼空間の特質が帝都であった東京特有のものなのか、もしくは他の都市にまで一般化することができるのか、比較検証する必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、近代の天皇制儀礼が今日にいたるまでの諸都市の形成に及ぼした影響を明らかにすることを目的とし、申請者がこれまで行ってきた東京の儀礼空間に関する研究成果を生かし、新たに東京以外の都市(外地も含む)の儀礼空間について都市的・建築的観点から検証し、都市間の比較を行う。

3. 研究の方法

上記の目的を達成すべく、以下の3つのテーマについて現地調査および資料調査を実施する。

(1) 近代の東京以外の都市における儀礼空間の都市的拡がりの変遷

研究代表者はこれまでの研究(前掲博士論文)において、近代の東京では皇居を核としながら、時代とともに儀礼空間が拡大・縮小したことを明らかにした。本研究では、東京以外の都市における儀礼会場と行幸啓経路の分布を把握することにより、儀礼空間の都市的拡がりの変遷が東京以外の都市でも見いだせるか、見いだせる場合には、それぞれの都市において、儀礼空間の核となる敷地・施設は何かを明らかにする。

(2) 近代の東京以外の都市における儀礼会場・儀礼建築の意匠・様式

東京以外の都市では、練兵場や公園、神社、学校の運動場等で天皇または皇太子臨御のもと奉祝会や軍事儀礼が催された。これらの事例を悉皆的に調査し、会場計画と会場を構成する建築の

意匠を検証することにより、近代天皇制と関連づけられた建築様式を明らかにする。とくに、事前調査により大規模な奉祝会が催されたことが確認できている京都の平安神宮、大阪の天王寺公園における儀礼会場について重点的に調査を行う。

(3) 近代の東京以外の都市における近代天皇制儀礼に伴う都市整備とその後の都市開発

儀礼の中心地であった東京とは異なり、東京以外の都市においては、儀礼とそれに伴う行幸啓の実施は数十年に一度の一大イベントであり、それを機に儀礼会場となる施設や行幸啓経路となる道路が整備されることがあった。本研究では、全国各地に存在する儀礼に伴う行幸啓・巡幸啓を機に整備された道路や施設について、それらの都市整備がなされた経緯とその後の都市開発の過程を明らかにする。

4. 研究成果

当初は、研究対象とする都市として、京都・大阪のほか、日本全国の旧軍都（弘前、水戸、高崎、名古屋、姫路、広島、熊本等）や事前調査により行幸啓に伴う都市整備の実施が確認できている都市（盛岡、厚木、宇都宮等）、及び台湾を想定していたが、コロナ禍の影響により、現地調査を行う研究対象都市を東京・京都・大阪、及び佐渡・大津に限定した。そのため、当初想定していたような日本全国スケールでの都市間比較は達成できなかったが、大喪儀の儀礼建築の譲与と転用と、内国勲業博覧会における天皇の儀礼空間を調査研究することにより、儀礼空間研究における新たな視点を獲得することができた。また、佐渡と大津における行幸啓に関する現地調査・資料調査と、台湾の行啓に関する資料収集を通して、近現代の行幸啓が地方都市や外地の都市に与えた影響の一端を把握し、今後、日本全国スケールでの都市間比較を行ううえでの足掛かりを築くことができた。具体的な研究成果は以下の通りである。

(1) 近現代の大喪儀における儀礼建築の譲与と転用（研究対象都市：東京・京都）

近代天皇制に関わる数ある儀礼のうち、京都と東京を舞台に執り行われた大喪儀では、大量の仮設建築が設営された。これらの仮設建築の多くは、儀礼後に敷地から撤去されたのち、さまざまな組織へと譲与され、転用された。こうした近現代における皇室関連建築の下賜は、さまざまな施設や土地が皇室との関係性を築くことのできる貴重な機会であり、近代天皇制と都市・建築の関係性を捉えるうえで重要な事象であると考えられる。

そこで、近現代に実施された全7件の大喪儀（英照皇太后大喪儀 [1897年]、明治天皇大喪儀 [1912年]、昭憲皇太后大喪儀 [1914年]、大正天皇大喪儀 [1927年]、貞明皇后大喪儀 [1951年]、昭和天皇大喪の礼・大喪儀 [1989年]、香淳皇后大喪儀 [2000年]）における儀礼建築の譲与と転用の歴史的変遷を追い、儀礼建築の扱い方や、そこに見出される記念性の差異について検証した結果、以下の点を明らかにした。

I. 譲与先の全体像とその変遷

明治から昭和戦前の大喪儀においては、儀礼建築は宮内省をはじめとする省庁に譲与もしくは管理換されるとともに、式場や陵所が置かれた地方公共団体、さらに慈善団体や病院、教育施設、寺院等に下賜された。その中心地は、式場や御陵の敷地の変化に伴い、時代とともに京都から東京へと移行した。また、儀礼建築の処分に関する法令も時代とともに変化した。

戦後は、儀礼建築の大半がプレハブ化し、儀礼後の譲与・転用の事例は大幅に減少した。

II. 儀礼建築の下賜と転用をめぐる諸問題

式場の中心施設である葬場殿（柩を安置する建物）を中心とし、大喪儀の儀礼建築の譲与と転用をめぐる議論を検証した結果、それをめぐる問題点として、①儀礼建築に見出される「穢」と「聖」／資材としての価値、②天皇・皇太后を祀る施設の位置づけ／行為の位置づけ、③皇室との関係性の構築／国民との関係性の構築、④転用施設の持つ記念性／土地との結びつき、の4点を見出すことができた。これらの諸問題を踏まえると、近現代における大喪儀の儀礼建築の扱い方や転用施設に見出される記念性は、戦前・戦後における政治体制や皇室をめぐる法制度、皇室と国民の関係性、そして環境への意識の変容などを背景に、時代とともに変化したことが明らかとなった。

(2) 内国勲業博覧会における天皇の儀礼空間（研究対象都市：東京・京都・大阪）

明治期に催された内国勲業博覧会では、天皇が開会式や閉会式、褒賞授与式に臨御したが、これらの式典は天皇を中心とした大日本帝国の統治体制を可視化する、極めて政治的な儀礼であった。本稿では、そのような博覧会の儀礼空間としての側面に注目し、明治から昭和戦中期までの日本において開催もしくは構想された博覧会（全五回の内国博と大博構想、紀元二六〇〇年万博構想）の会場について分析を行った。その結果、①これらの博覧会では一貫して天皇の儀礼的行為が会場計画の骨格を規定していたこと、②式典の舞台となる式場の変遷には、日本的（もしくは東洋的）な要素と西洋的な要素との複雑な拮抗が見出されること、そして、③とくに紀元二六〇〇年万博の式典では、天皇と万単位の人々が一度に対峙する「一君万民の政治空間」が想定されていた可能性があること、の3点が明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 長谷川香	4. 巻 87,801
2. 論文標題 近現代の大喪儀における儀礼建築の譲与と転用に関する研究（その1）：大正記念館建設にいたるまで	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本建築学会計画系論文集	6. 最初と最後の頁 2229,2240
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3130/aija.87.2229	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1. 著者名 長谷川香	4. 巻 88,808
2. 論文標題 近現代の大喪儀における儀礼建築の譲与と転用に関する研究（その2）：大正記念館と翔天亭の再建を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本建築学会計画系論文集	6. 最初と最後の頁 1767,1778
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3130/aija.88.1767	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1. 著者名 長谷川香	4. 巻 2
2. 論文標題 天皇の儀礼空間としての博覧会—内国勸業博覧会と二つの博覧会構想に注目して—	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 万博学研究	6. 最初と最後の頁 116,142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1. 著者名 長谷川香	4. 巻 26
2. 論文標題 大喪儀における仮設建築の下賜と仏教界	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 神園	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 長谷川香
2. 発表標題 近代の博覧会における天皇の儀礼空間 ―― 会場計画と式場建築に注目して
3. 学会等名 万博学研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 長谷川香
2. 発表標題 儀礼空間から読み解く皇都・東京
3. 学会等名 TCS国際シンポジウム「都市問題再考：歴史、メディア、環境」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

とくになし。

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------